

# やまと 民俗への招待

鹿谷 熱

暑くて寝苦しかった夏が遠のいて、たちまち薄い掛布団では頼りなく思う季節になった。

9月2日付け本紙朝刊「名作の現場」で、酒井順子氏が「方丈記」を取りあげていたので、手元の岩波文庫を久し振りに繰ってみた。「ゆく河のながれは、絶えずして、しかももとの水にあらず」という有名な冒頭から始まり、「大火、壮風、都遷り、飢饉、洪水、疫病、大地震と次々に襲いかかる困難と翻弄される人々の姿を描き、その無常の様と自らの人生の葛藤から出家遁世が語られる。

中で作った移動可能な方丈（4畳半ほど）の庵とそこで暮らしが描かれている。庵の東に庇を出して、その下に柴と камドを置き、内部の西北の壁には、阿弥陀の絵像を安置し、法華経を置く。「東のきはに、蕨のほとろを敷きて、夜の床とする」と寝床のことも記している。本によつては「蕨のほとろ」と表記しているものもあるが、この寝床の記述は以前から注目していた。

県内各地で、蕨の葉がトロ、ホドロ、ウトロと聞いていたからである。ホトロとは蕨の古名とする方言辞典もあるが、平む（源俊頼）という歌



春の早蕨取り（「大和名所図会」より）

先の「名作の現場」では、「蕨の穂を寝床としていた」と説明していた。これがよく分からぬ。方丈記の注釈書もいづれも特に詳しく語っていない。方丈記の注釈書もくのは、やはり枯れた蕨

安時代末に「春くれば折る人もなき早蕨はいつかほどろにならむとすら」といふのが、寝床に敷くのが寝付いて粗相することがある。わらのシビを入れたシビ布団を用いた男さんからかつて聞いたことがある。

京都育ちの鴨長明も用了いた言葉は、今も大和で生きている。

表

## 寝具代わり 蕨の枯葉